形式の馬具などが集中する地域が存在する。これは、在地からの受容ではなく、外部からの圧力ではないかとの見解が示され、南九州における渡来系遺構・遺物の流入について、さらなる整理が必要である。豊後地域においては、伊予地域からの渡来系遺構・遺物の流入の可能性が示唆されている。

各地域においては、これまで馬・鉄というキーワードが一部の地域に限られた感があった。しかし、今回のシンポジュウムのなかでは結論が出なかったが、今後の課題が整理されたと考える。

4．おわりに

今回の研究会は、九州における渡来人研究の第1歩になればと企画した。遺物の検討は、言うまでもなく考古学の基本である。しかし、渡来(系)遺物が1点のみの場合の解釈をした場合、これまでは、イレギュラーとして取り扱われ、積極的に評価をしていないきらいがあった。しかし、亀田氏の報告の中でも示されたように、渡来(系)遺物、遺構を幾つものフィルターを重ねることにより、渡来人の痕跡を積み重ねていく作業を積極的に行うことが不可欠である。その際には、所属の自治体の行政界の中だけでの評価ではなく、隣接する行政界境を越えた地域を論じることが今後必要ではなかろうか。例えば、那珂川町野口遺跡と福岡市老司古墳は、谷を挟んで対峙している。さらに、佐賀県基山町伊勢山遺跡と福岡県小郡市花聳1・2号墳、西島遺跡は同一丘陵の西端と東端に位置するなど関連を窺うことができるものがある。

最後になりましたが、シンポジュウムにおける司会者の進行の不手際で白熱した議論にまで及ばなかったこと、文献史学からのアプローチなど今後に課題を積み残したことは、否めない。しかし、今回の研究会では、九州各地域における渡来人の足跡を追求する第1歩になったと信じる。

各県の情報

……・ 鹿児島県 ・……

大隅串良 岡崎古墳群の発掘調査－2002～2004－ ――― 橋本達也(鹿児島大学総合研究博物館)

Ⅰ　調査経過と立地

発掘調査に至る目的と経緯　鹿児島県肝属郡串良町岡崎古墳群では、これまでに数次の発掘調査が実施され、古墳時代中期を中心とする古墳群であることが確認されていた。なかでも、岡崎4号墳・1号地下式横穴墓では木棺直葬を主体部とする古墳に従属する地下式横穴墓、15号墳では箱式石棺から甲冑が出土するなど南限域の古墳時代社会を考察する上で多くの成果が得られていた。

これらの重要性を鑑みて、2002年度から鹿児島大学総合研究博物館は当古墳群の学術調査を実施した。2002年8月、新規に名称未設定古墳を岡崎18・19・20号墳と命名した上で調査を開始し、2003年度までの間に4次にわたる発掘調査を実施している。

古墳の立地　岡崎古墳群は現状で20基ほどの古墳からなる。肝属平野の西を画するシラス台地上の縁辺部に形成され、本古墳群からは肝属川下流域の平野の大部分が見渡せる。とくに平野中央部にある肝属郡東串良町唐仁古墳群までは直線距離で約3.5kmであり、その位置が視認できる。

岡崎15・18・20号墳は眺望の良い台地縁辺部に一定の空間をあけて並び、岡崎古墳群中でも中心的な首長墳であるとみられる。

Ⅱ　岡崎18号墳(図1)

(1)墳丘・墳頂の調査

墳丘　直径約20mの円墳である。現存の高さは約2.4mを測る。葺石・埴輪等の外表構造物はない。本来の墳丘は相当量流失しており、段築等は確認で

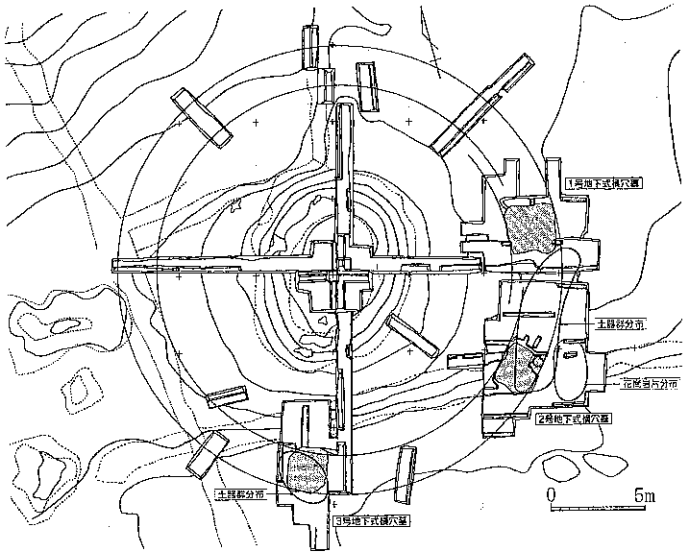

図1　岡崎18号墳 墳丘平面図

きない。墳丘外周には約2.8mほどの周溝状の掘りくぼみがある。ただし、くぼみの外側は緩やかに立ち上がり、明瞭な溝にはならない。墳端部には3カ所、地下式横穴墓の竪坑がとりついている。位置関係から墳丘築造後、墳裾に企画配置されたと考えられる。地下式横穴墓はいずれも玄室を墳丘側に向けて掘り込んでいる。

墳頂　墳頂部では地山までの掘り下げを行ったが、埋葬施設は確認できなかった。墳丘上部の土は著しく流失しており、また流土中に多くの中世土器を含むことから、埋葬施設は早い段階に流失したか、もしくは中世以降に削平や破壊がなされたと考えられる。

（2）墳丘東側祭祀空間

東側の墳丘裾部で土器を用いた祭祀空間が良好な状態で出土した。土器は細片化しており祭祀終了後、意図的に破砕されたと考えられる。須恵器大甕・甕・樽形甕と土師器高杯を中心として、土師器壺・小壺・鉢・成川式土器壺などがある。須恵器大甕はTK73型式に位置づけられる。また土師器は在地的な成川式土器とは様相を違えた型式が選択されている。整理途中であるが現在、高杯は10個体確認できている。祭祀空間内では先端部を破損した圭頭鏃も1本出土した。

須恵器大甕は2号地下式横穴墓の竪坑上面コーナー部に設置されており、この地下式横穴墓を埋めた後の祭祀に伴うことがわかる。ただし、2号地下式横穴墓の葬送に伴うものか、1号・2号地下式横穴墓あわせての祭祀か、18号墳全体に関わる祭祀であるのかは解釈の余地があろう。

（3）1号地下式横穴墓（図2）

竪坑　上面の平面形は2.7×2.6mを測り、正方形に近い。最深部までは深さ1.8mを測る。埋め戻しには4段階の工程が確認できる丁寧なものであった。閉塞は花崗岩の板石を羨門部に平積みした後、それに大型の一枚石を乗せ、羨門部に立てかけて密閉する。閉塞石は、さらにそれを粘土で被覆する。南東部コーナーには昇降用とみられるステップがある。東壁にもステップ状のくぼみがあり、埋葬施設の構築作業に関わるものと考えられる。

羨道・玄室　羨門には方形に刳り込んだ段を有し、長方形に開口する。羨道は幅67cm、高さ40cmを測る。羨道天井部は玄室に向かって段をもちながら

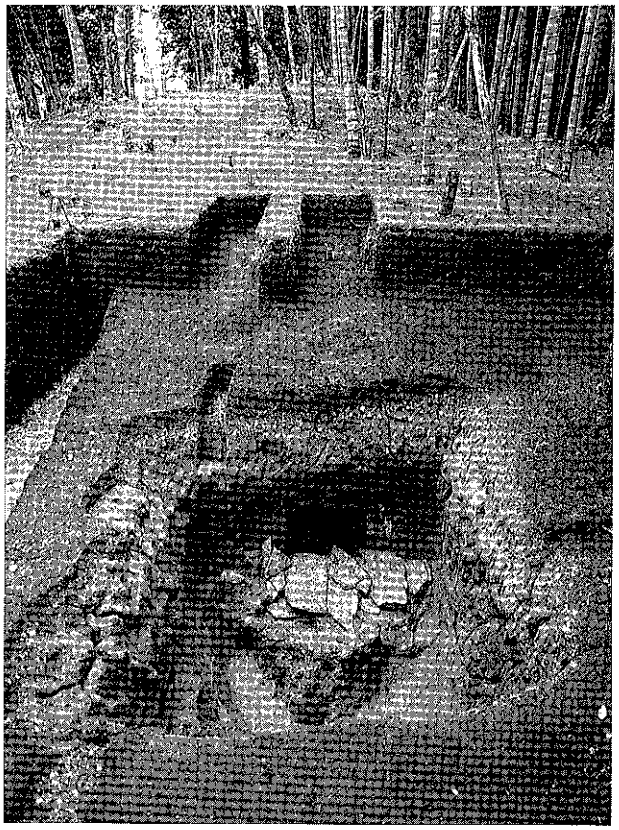

図2　岡崎18号墳　1号地下式横穴墓

斜めに上がる。

玄室内天井部の半分程度は崩落していた。玄室は平入りで切り妻家形をなし、大棟は突帯、軒は抉った段差によって細部を造り出している。玄室は奥行き約1.4m×幅2.6m×高さ0.88mを測る。

天井・壁には加工痕が明瞭に残り、2種類の工具を用いたことが確認できる。

玄室内には花崗岩板石製の箱式石棺を安置し、北頭位で1体の埋葬がなされていた。棺身は長さ2.25m×幅0.67-0.53m・内法は長さ2.0m×幅0.37-0.35m×高さ0.35mを測る。

副葬品には棺内に剣2・鉄斧1・刀子1・鑷子1、棺外に鉄鋌2・剣1・U字形鍬鋤先1があった。頭部には水銀朱が散布され、顎骨がわずかに残存し、頭蓋骨片・大腿骨の残骸もあったが人骨は残りが悪く、性別や形質に関わる情報は確認できない。棺外には一部ベンガラが散布されていた。

（4）2号地下式横穴墓（図3）

竪坑　竪坑の幅2.3m、長さ2.0mを測る横長の竪坑である。上面から最深部までの深さは1.85mを測る。竪坑の埋設工程は1号地下式横穴墓とほぼ同じであるが、2号地下式横穴墓では埋め戻しの過程で

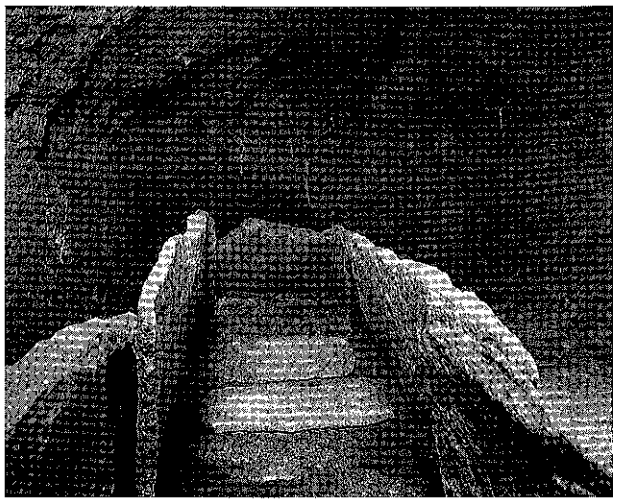

図３　岡崎18号墳　２号地下式横穴墓の箱式石棺

相当量の赤色顔料を散布しており、埋土中の各所から赤色顔料が出土した。

東壁中央部に４段のステップ状くぼみを検出したが、掘り込みが浅く、昇降用ではないであろう。また竪坑外東側には花崗岩片が散在し、石棺の最終調整をここで行っていたことが判明した。

羨道・玄室　羨門は１号と同様に方形の刳り込み段を有し、長方形に開口する。羨道は幅65cm、高さ55cmを測る。羨道天井部は完全に崩落しており形状は不明である。

玄室は平入りの寄せ棟家形である。玄室長2.4m、玄室奥行き幅1.5m、高さ0.95mを測る。棟には特別な造作はないが、軒は段差で表現されていた。最大の特徴は天井・壁面全体に赤色顔料が塗布されていたことである。ただし、壁・天井は全体の一割以下しか残存していなかった。

玄室内には花崗岩板石製の箱式石棺を安置し（図３）、北東頭位で１体埋葬していた。石棺は内面全体、外面下半部に赤色顔料を塗布していた。棺身は全長2.145m×幅0.70-0.56m・内法長1.75m×幅0.54-0.42m×高さ0.38mを測る。

副葬品はすべて棺内にあり、鉄剣・鉄斧・方形鍬鋤先・刀子・イモガイ製腕輪、用途不明の錫が各１点出土した。頭部には水銀朱が散布されていた。また、頭部側小口付近には藁状の繊維束が置かれていた。人骨は、歯や下顎骨・脊椎・鎖骨・大腿骨などが形状を残していた。成年女性とみられる。竪坑中、玄室内・石棺塗布の赤色顔料はいずれもベンガラである。

（５）３号地下式横穴墓

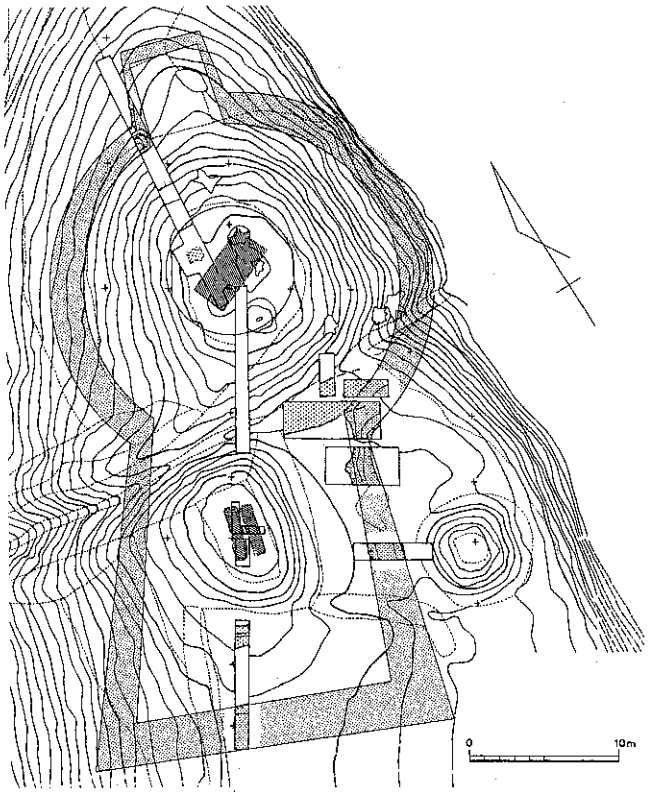

図４　岡崎20号墳　墳丘推定図

竪坑上面からは意図的に破砕されたと考えられる土師器壺２個体が出土した。初期須恵器の大甕胴部片も１点出土している。また、２号地下式横穴墓よりは少いが、赤色顔料が竪坑埋土中に散布されていた。掘り下げは土層主軸ベルトを残したまま、粘土被覆上面まで行っている。

３号地下式横穴墓の竪坑は2.35m×2.0mを測る。上面の平面形は角が不明瞭で、やや不整形な長方形となる。また、肩部の傾斜は緩やかである。方形・長方形を呈し、上端面から急激な掘り込みを行う１・２号地下式横穴墓とは掘削法が異なっている。

閉塞石は頂部の一部を確認した。墳丘裾部から竪坑を掘り込み、玄室を墳丘側に向けること、花崗岩の板石で閉塞し、粘土被覆を行うことなどの点において、１・２号地下式横穴墓との共通点がある。一方、羨門には方形の段状刳り込みはなく、平坦面にそのまま閉塞石を立てかけている。そのため羨門と閉塞石が密着せず、わずかに隙間が空いていた。

Ⅲ　岡崎20号墳（図４）

主として墳丘構造の確認を目的にトレンチ調査を実施している。いまだ調査は不十分ではあるが、現状では、全長約39m、後円部径約21m、前方部幅約19mの前方後円墳と考えられる。

後円部　後円部墳丘下半部は地山削り出し、上半部は盛土である。墳頂部南端では、墓壙の一部とみられる落ち込みが確認でき、この周辺からは赤色塗彩・焼成前底部穿孔の二重口縁壺などの土器が出土した。また、北側墳端部では周溝を確認した。円弧を描く周溝と、それから直角近くに折れ曲がる浅い溝が検出され、尾根沿いに造り出しか渡り堤の存在する可能性が考えられる。

前方部　前方部頂では白色粘土で被覆した２基の粘土槨上面を検出した。そのうち１基は長さ3.2mを測る。墳頂部では埋葬施設上面から赤色塗彩のある二重口縁壺や甕、高杯などの土器片が出土している。また、前方部頂の平坦面には西側に未調査スペースがあり三棺並葬の可能性もある。前方部墳端の東側・南側では周溝を確認し、東側内部からは底部穿孔壺も出土した。

クビレ部　後世の削平で改変を受けているが、周溝内部からは赤色塗彩の焼成前底部穿孔壺が出土している。

下層遺構　また、クビレ部から後円部墳丘下にかけて溝状の下層遺構が確認された。内部にはほぼ完形の二重口縁壺、安国寺式の複合口縁壺の各１個体が併置されていた。いずれも焼成後穿孔を行っている。古墳時代前期前半と考えられる。

成果概要　今回、20号墳は前方後円墳に粘土槨という典型的な前期後半の首長墳の構造を備え、また肝属平野の古墳出土資料としては初見の底部穿孔二重口縁壺をもつことが判明した。肝属平野における古墳出現の様相を解明し、前方後円墳の地域展開を考察する上で重要な資料となった。ただし、調査はまだ不十分で、実態の解明を目指すには今後さらに追加の調査を行う必要がある。

Ⅳ　岡崎15号墳

既発掘調査で、花崗岩製箱式石棺から長方板革綴短甲・頸甲・肩甲、硬玉製勾玉、碧玉製管玉が出土している。以前は周辺の伐採に限界があり、小規模な円墳が想定されていた。その後、新たに伐採や切り株の除去などを行ったところ、前方部とみられる高まりを確認した。そこで測量調査を実施したところ、全長約24mの帆立貝式前方後円墳である可能性が考えられた。後円部径は約18m、前方部幅は約12mと推定する。既調査の出土遺物などとともに再評価が必要であろう。

Ⅴ　まとめ

岡崎古墳群における築造動向　岡崎古墳群の展開を整理すると表１のようになる。

表１　岡崎古墳群における各古墳の要素

盟主墳	時期	代表的な資料	墳形・主体部等
20号墳	前期後葉～中期初頭	二重口縁壺等の土器群	前方後円墳（粘土槨）
15号墳	中期前半	長方板革綴短甲	前方後円墳（石棺）
18号墳	ＴＫ73	須恵器、U字・方形鍬鋤先	円＋地下式
５号墳	ＴＫ216～ＴＫ208	須恵器	（円）
４号墳	ＴＫ23	須恵器・土器群	円＋地下式

岡崎古墳群では古墳時代中期を通じて古墳築造が行われている。はじめは、前方後円墳から築造を開始し、岡崎18号墳の築造を契機として、首長墓に円墳と地下式横穴墓の従属葬という組み合わせが導入される。この段階を首長墳における地域的な独自性の発現画期とできる。

岡崎18号墳地下式横穴墓　竪坑の大きさ・被覆粘土の多さ・竪坑埋土の丁寧さ・閉塞敷石の大きさと多さ・石棺の隙間の少なさ・石材の厚さなどの点において１号地下式横穴墓が最も丁寧で厳重な作りである。３号地下式横穴墓は竪坑が不整方形で、羨門部に段状刳り込みをもたないなど、もっとも粗雑である。これらから、１号→２号→３号の構築順であると考えている。

花崗岩板石閉塞やその粘土被覆は３基の地下式横穴墓に共通し、とくに内部調査を行った１号・２号地下式横穴墓では多くの共通要素が確認できた。両者は非常に近しい関係にあると理解できる。一方で、玄室形態には大きな差がある。これは時間差や技術差ではなく、意図的に造り分けていると考えられる。その構造が表象する被葬者の性格等に関わるものではないかと推定する。

古墳と地下式横穴墓　古墳の周溝を利用して竪坑を築く地下式横穴墓はこれまでに岡崎４号墳や宮崎県高鍋町牛牧１号墳、西都市堂ヶ嶋第２遺跡、都城市築池地下式横穴墓群などで確認されている。しかし、これまで岡崎４号墳が唯一の中期の例で、その他は後期に属していた。ここではＴＫ73型式段階、地下式横穴墓の出現初期段階から古墳従属葬として存在することが判明し、当初から地下式横穴墓にも多様なあり方・性格差が存在したことを明らかにした。

地下式横穴墓の初現　地下式横穴墓は出土遺物から中期前半代には出現することが確実であるが、岡崎18号墳では大隅での地下式横穴墓の出現の年代的な定点を初めて確認した。また、平入り家形が初期段階から存在することを明確なものとした。

花崗岩製石棺　大隅地域ではこれまで内部に軽石製石棺を安置する地下式横穴墓が知られていたが、花崗岩は初確認である。花崗岩製から軽石製へと変化した可能性も考えられる。岡崎で用いられた花崗岩石材は古墳周辺には存在せず、肝属川南岸から最短距離でも５km以上の距離を運んだものである。また、肝属平野において花崗岩石材の埋葬施設をもつのは、唐仁大塚古墳・横瀬古墳・岡崎15号墳など一部の首長墳でしかない。18号墳の地下式横穴墓に用いられた石材には首長層における階層的な位置づけが反映されている可能性が高い。

土器の様相　鹿児島の古墳時代には成川式土器とよぶ独自性の顕著な土器様式が存在するが、岡崎18号墳出土の土器群は土師器と称すべきものである。また一括の中には成川式土器も含んでいる。須恵器出土の少ない当地域において、これらの資料は今後、土器編年において基準資料となろう。また、岡崎18号墳出土の大甕・樽形瓶はその特徴から陶邑産須恵器の可能も考えられる。ところが瓶はかなり特殊な様相を呈しており、今のところ瀬戸内地域で単発で短期操業するような窯の製品ではないかと考えている。また、これによく似た瓶が、同じ串良町の上小原４号墳に伴う状態で出土している。上小原４号墳では同時に樽形瓶も出土している。また、隣接する高山町内でも樽形瓶が出土し、大崎町横瀬古墳でも初期須恵器が数器種出土している。これらと合わせて岡崎18号墳出土資料は初期須恵器の生産・流通を考察する重要な資料となった。

交流をめぐる問題　墳丘裾部の初期須恵器は広域流通物資であり、また鉄鋌やU字形鍬鋤先など朝鮮半島系文物、琉球列島産イモガイ製貝釧も出土した。鉄鋌は南九州では初出土である。U字形鍬鋤先も出現期資料で半島製ないしは半島系製品であろう。鐙子もその可能性が高い。

地下式横穴墓に葬られた首長層は単に南九州の地域的な閉鎖性によって独自の墓制を生み出したのではなく、古墳時代社会に連なるさまざまな情報を入手し、前方後円墳を中心とする政治的な秩序を熟知した上であえてこの墓制を生み出し、選択したことを明確にした。

肝属平野における古墳時代の社会構造　岡崎18号墳の成果は首長層における前方後円墳以外の選択肢と南九州の地域的独自様相の発現過程を明確にするものである。岡崎古墳群の造営は、唐仁古墳群、横瀬古墳の築造期に併行する。すなわち、この地域の盟主墳には大型前方後円墳があり、岡崎古墳群はその下位の首長墳と位置づけられる。唐仁古墳群や横瀬古墳付近には地下式横穴墓はないから、古墳と地下式横穴墓の共存化も中下位首長層のもとで起こった可能性が考えられよう。また、上位首長のみではなく中下位首長層にまで、広域流通財が供給されており、肝属平野においても古墳時代中期には列島規模の政治的・社会的共有圏に属していたことが読みとれる。一方、最終的には律令国家により、異民族・隼人として疎外される列島社会との乖離の兆しが墓制・生活様式・各種生産物などにおいて古墳時代中期に始まり、後期に明瞭化して行くのである。

古墳築造南限の肝属平野の古墳とそれを取り巻く文物のあり方は、古墳時代社会の構造を読みとる上できわめて重要である。今後、資料整理を通じて、さらにその意義を明らかにして行きたい。

お知らせとお願い

第31回九州古墳時代研究会（古墳見学会）の案内に同封してお知らせしましたように、先の研究会時に集めた年会費が当日のチェック分より2,000円多いことが判明しております。つまり、１年分あるいは２年分お支払いいただいた方の中にチェック漏れが生じている可能性があります。宛名シールの会費納入状況をご確認いただき、お心当たりの方はご連絡下さいますようお願いいたします。なお、お申し出のない場合は不明金（収入）として処理する点もご理解下さいますようお願いいたします。

編集後記

本号の発行も大変遅れてしまいました。本当に申し訳ありません。昨年度の積み残しが１号分あるので、今年度はこれを含めて３号分を発行しなければなりません。でも、次号の予定が立っていません。各県の幹事の方を中心に、ぜひ原稿をお寄せ下さいますよう心からお願いいたします。短いものでも大歓迎です！

さて、11月26・27日は鹿児島での古墳見学会。近年、新しい発見が続いている地域です。今号を手に、最南端の前方後円墳の地へぜひお集まり下さい。　（杉井）